

第100期部門長挨拶

部門長(第100期)佐藤 智明

第100期(2022年度)技術と社会部門の部門長を務めさせていただくことになりました神奈川工科大学の佐藤智明と申します。2020年に発生した新型コロナウイルスによる社会環境の変化は我々学会の活動にも大きな重しとなつてのしかかりました。2021年度にそうした苦しい中を部門の活動を停滞させることなく乗り切れましたのは部門の皆様のお力も勿論ですが、第99期の大高敏男部門長のリーダーシップによるところが大きかったと思います。まずはこの場を借りて感謝申し上げたいと思います。また、われわれの活動を潤滑油のような形で支えてくださった同じく第99期の田辺基子幹事にもお礼を述べさせていただきます。このように前年度の感謝を述べて始まる部門長挨拶は異例かもしれませんが、それほど2020から2021年にかけての状況は大変な年だったと思います。2022年度は、新型コロナウイルスの影響はかなり小さくなっていくことを期待いたしますが、一方で、年度の切り替わる時期に勃発したウクライナとロシアとの戦争による影響は地域や領域・分野を超えて、われわれ学問の界限に対しても少なからず影響を及ぼすことが危惧されます。今後の学会活動についてもまだまだ苦しい対応が求められる可能性が高いと思います。一方で、昨今のこのような混沌とした社会情勢では、技術によるサポートが非常に有効になることが多いと考えます。例えば、我々技術と社会部門の研究領域でもある教育分野においては、学校現場ではコロナ禍で生徒や学生たちが学校に通えなくなった代わりにICT技術を使った遠隔授業が一気に広まり、逆にそれまでなかったような教育効果も上げるようになっていきました。また、AIを搭載したドローンなどを使った配達等の新しい技術などもコロナ禍の間隙を縫って広まろうとしています。そういう意味では、我々の研究対象である技術と社会の関係が大きく変わろうとしている過渡期と考えることが言えるかもしれません。また、このような新しい技術が社会に広まろうとしているときこそ、先人が過去に新しい問題に直面とてきたときにどのような技術が生まれてどのように活用されてきたのかを検討することも非常に重要なことで、それは我々の部門の範疇であるある技術史から紐解くことができると思います。そう考えると、昨今の混沌とした社会である時こそ、我々技術と社会部門の必要性をアピールできる絶好の機会となる可能性があります。となると、2022年度は部門にとって非常に重要な年度になる可能性があり、その重圧を感じ、身が引き締まる思いであります。そうした中で、私と共に高橋芳弘副部門長と結城宏信幹事を三役として迎えまして、第100期の技術と社会部門の運営に関わらせていただくことになりました。これまで、歴代の部門長の先輩方が築いてこられたものを礎とさせていただきながら、更に本部門を発展させられるように、部門の皆様をはじめと



して学会全体のためにもできる限り尽力させていただくつもりでありますのでこの新執行部をどうぞよろしくお願い申し上げます.

2022年4月

(神奈川工科大学教授 佐藤智明)

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.45

(C)著作権:2022 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門